
事業報告

平成13年度
公開講座概要

総合研究所が担当する平成13年度公開講座は、文化講座、社会学部公開講座、桜井市生涯学習シリーズ奈良大学教養講座、都祁村生涯学習シリーズ奈良大学教養講座の四講座を、前年に引き続き開催した。

近畿文化会と共催の文化講座は22年目を数え、「世界遺産－ならと世界－」をテーマに開催、受講申し込み者は、178名で、全5回の講座に延べ601名の受講があった。桜井市、都祁村の教養講座は、それぞれの教育委員会との共催で実施、地元の希望を尊重し、地域に密着したテーマを中心に開催した。桜井市教養講座では、83名の申し込みで、延べ295名が受講し、都祁村教養講座には45名の申し込みで、延べ141名の受講があった。

また14回目の社会学部公開講座は、「女性・環境・文化を考える－古今東西総ざらい－」をテーマに開催し、延べ143名の聴講があった。

桜井市生涯学習シリーズ
奈良大学教養講座

私たちのまわりに目を向けよう
－郷土を学び新しい時代を知る－

6月3日 さくらい・たんじょう物語

小泉 泰一

山中と国中の結節点さんちゅう くになかにあり、奈良盆地南東部の交通の要地に位置する桜井の揺籃は、交易の場として、また宿場町、市場町としてその機能を発揮し、門前町としても多くの人々を引きつけてきたことなどにみることができる。

幕末の大和は267の地頭領主によって統治され、その発せられる政令の類も当然ながら異なり後世にさまざまな形で影響を及ぼしてきたところである。

廃藩置県以降、大和の国は堺県や大阪府に併合される中で、人々は独立置県運動のために果敢に立ち上がることになる。

幕末から明治新政府への行政区画の変遷を中心に時代的、社会的要請に対応して「さくらい」

が拡大発展してきたプロセスを種々の資料をもとに概説・検証してみたい。

6月17日 **遺跡や文化財の活用を考える**
－イスラエルを例として－

藤原 剛

このごろでは毎日といって良いくらい、考古学上の発見や貴重な資料の発見のニュースが流されている。またニュースにならなくても毎日多数の遺跡の発掘が行われている。こうして発見された遺物や貴重な資料は整理され保存されていく。最近では発掘の速度に整理・保存が追いつかなくなって、せっかく発見された物が倉庫に埋もれてしまっている例も多い。

しかし我々がこうした遺跡や遺物は単に保存するだけでなく、そこに昔の人々の生活や文化を見、考えることで現代の我々の生活や文化に生かして行って初めてその意味を持つものである。本講演では考古学が非常に盛んで、遺跡や遺物を様々に活用しているイスラエルの例を紹介しながら、具体的な活用法についていくつかの提案をした。

7月1日 **古代桜井の豪族たち**

水野 正好

大和の天理市大和神社の地には古く倭国の王都、倭国女王卑弥呼の都が置かれていたと私は説いている。続く倭国女王壺与の時代もこの地に都は存在したと考えている。当時、この都をめぐる出雲・吉備・尾張・丹波氏の居住する集落が営まれ、その氏上たちが宮都に勤め、女王執政を援けていた様子が考古学から読みとれる。

崇神天皇は三輪山西麓、磯城瑞籬宮に遷都する。続く垂仁、景行天皇の都もその北巻向から珠城の地につくられるように三輪山西麓が都宮の適地とみなされていく。この時代も出雲・吉備・尾張氏の活躍が指摘されるが、一方では息長・和邇氏や阿倍氏の顕著な活動が目につく。こうした各氏は、それぞれの地や、故郷にすばらしい遺跡をのこしている。こうした古墳の姿を見ながら、その盛衰や担当した政務の内容を具体的に検討していきたい。楽しい古代史、人の息づく古代史を語りたい。桜井は歴史の檜舞台であった。

9月23日 老いの心と自己表現・臨床心理の視点から

藤掛 永良

(1) 老いの特徴 ①身体的、心理的、社会的機能の減退と喪失 ②減退と喪失に起因する失望、不安、孤独感、自尊感情の低下 ③「基本的不安」の発現と防衛(抑圧・否認・外在化) ④神経症的傾向への進行(自己縮小的依存型・自己拡張的支配型・自己限定的断念型) ⑤理想化、仮幻の自己、自己疎外

(2) 老年期の発達課題 人間の生涯には「発達段階」があり、各発達段階にはその段階で果たさなければならない「発達課題」がある。老年期のそれは、「自我の統合」であり、それが終局の自己実現である。それが果たせない時絶望ということになる。

(3) 老いのセルフ・ケア ①減退・喪失に伴うハンディキャップの克服 ②不安・葛藤の克服と自己実現・自己完結

(4) 老いを生きるころ (坂村真民の詩「二度とない人生だから」等の紹介)

以上の概要を、できるだけ具体的にわかりやすくお話させていただきます。

10月14日 ユーモアのあるガーデニング

中尾 真理

現代生活においては、①時間のゆとり、②自然とのふれあい、③美しいものに感動する心のゆとり、と得ることが難しくなっている。ところが、ガーデニングをするためには以上の3点はどうしても必要な最低条件である。ストレスや制約の多い現代に生きながら、優雅にガーデニングを楽しむには、どうしたらいいだろうか。ヒース・ロビンソンとK.R.G.ブラウンの『わが庭に幸いあれ』(筑摩書房)という愉快的園芸書をお手本に、ユーモアをもって、この難題に挑戦してみたい。必要なのは、園芸店で売っている色彩豊かな苗や高価なトレリスではなく、「現実」を直視する冷静さ、常識的かつ健康でバランスのとれた「理性」、それに未来への「展望」だけである。奈良には豊かな自然があり、東京、大阪などに比べて、人間らしい住環境に恵まれている。ガーデニングを楽しむ、程よい文化的生活も可能である。この好条件を生かし、毎日の生活をさらに豊かにすることを考えよう。

10月28日 I T 革命で生活はどう変わるか？

吉 田 光 次

情報通信技術（I T、または、I C T）の普及は目覚ましい勢いで進んでいる。携帯電話、デジタル衛星放送、インターネットに見られる技術の発展はこれまでにない多様な情報にあふれた生活を想像させ、私たちをわくわくさせる。大抵のことが家にいながらにすることができる、まさに近未来を描いた物語に見られるような生活だ。

パソコンなどの機械の操作は初心者にはまだハードルが高いかもしれないが、身の丈にあった利用を考えておくと損はない。

一方で、新しい技術に全くついていけない人々は、新しい世界から取り残され、その恩恵にあずかることができないのではないかと、不安になる。このような不安は「情報格差」という言葉に端的に表れている。将来、インターネットでしか重要な情報を得られなくなったり、チケットを入手できなくなるかも知れない。実際どのような方面でそのような格差が起ころうのか、考えてみる。

都祁村生涯学習シリーズ
奈良大学教養講座

自己実現をはかる生涯教育

5月20日

《大和の歴史・文化》
「平城京のまつりとまじない」

水野正好

長い間、都城として息づいた平城京は、人口も多く、壮大な伽藍、十字に整然と貫通する大和小路、見事に水のはられた庭園、芽吹く大路の柳、雑踏する東市西市、この官都に住まう天皇・貴紳や庶人のざわめきが手にとるように読みとれる都であった。

この都は人口の多い都市、それだけに都市災害も大きく深刻。噂から惹き起こされる恐怖も甚大、流行する病気には極めてもろいといった一面をもった。負の世界である。

噂に上る人物は厭魅呪詛を恐れ、のろいの人形代で詛い、人形代を用いてのろい返しの呪儀を行う。病—それも流行する強烈な病には人形代でも一撫一吻、鬼面墨描土器への息鬼の封入流し、馬形代による祓流しなど、実に整備された対策がとられている。

金銭を用いた地鎮や龍を象った美しい苑池庭園、功ある人物に許された鑄銭など平城京は悲喜こもごも、明暗に彩られた都として歴史にとどめられるべき都であった。

5月27日

《大和の歴史・文化》
「古典芸能・伝統芸能の保存・継承の為に」

笠置侃一

かつて、人々の営みとともに生まれ育まれて来た多くの芸能が、今も多くの伝統芸能として伝承されている。しかしそれらの中にはその継承が充分なものではなく、継承に困難を来しているものも少なくない。日本は明治維新の改革の中で、学校の音楽教育で教わるのは例えば、モーツァルトやベートーベンのようなヨーロッパのクラシックである。これらの音楽は私たちの日常生活とはあまり関係はないが、何か高級で“文化的”で気取った世界であるように錯覚しがちである。それぞれの民族が、それぞれすばらしい文化・芸術・スポーツを持っていることは言うまでもない。日本人はもともと歌や音楽をどのように考えていたのか、また歌や音楽は人々の暮らしのなかでどのような役割を果たしてきたのかなど、自分の眼ですなおに見直してみる必要がある。伝統芸能は担い手の一人ひとりばかりでなく、地域社会全体の協力によって可能なのである。

8月5日 《人間としての生き方を考える》
「人生の歩みとお互いの理解」

松井春満

人生80年時代になった一方で、IT革命といわれるように技術的知識のレベルは驚くほどの発展を遂げ、高齢者はよほど意識して学習を重ねないと、世の中の進歩から取り残されそうな時代になった。若い世代と年配者の間の思考のギャップは益々大きくなっていく。長生きしても必ずしも幸せでないという思いの高齢者も多くなっている。また国の内外に目を転じると、考え方の違いから人々の間の争いは依然として尽きることがない。

こういう現象は人間が本来もっている思考の働きとどう関係するのであろうか。現代に際だった現象なのか、あるいは人間の思考がもつ宿命というべきことなのだろうか。

そういった問題を、人間の思考の働きがもつ共通構造と人生の長いプロセスの辿り方の特徴という点から考察し、世代の違い、民族の違い、宗教の違い、あるいは思想の違い等々を越えて、人間同士が理解し合い平和に共存する可能性の有無を探ってみたい。

8月19日 《人間としての生き方を考える》
「受け容れる－星野富弘さんの生き方に学ぶ－」

大町公

人生には、苦しいこと悲しいことがたくさんあります。どう対処したらいいのでしょうか。それを星野さんから学びたいと思います。

星野さんは体育の教師として高崎市内の中学校に赴任しました。そのわずか二ヵ月半後、放課後のクラブ活動指導中、誤って首の骨を折り、肩から下の機能一切を失いました。その星野さんが口に筆をくわえ、絵と詩を書き、希望を持って生きようとするまでを、手記『愛、深き淵より。』を中心に、詩画集を参考にして、見てゆきたいと思います。

負傷後の星野さんの生き方で、最も印象深いのは〈受容〉、つまり、あるがままの自分を〈受け容れる〉という姿勢です。己れをそのまま受け容れ、その時、何が可能で、何が可能でないのかを考察し、可能なことだけを行おうとします。可能でないことは決して望みません。でも、そこには何と多くの可能性が残っていたことでしょう。誰にも負けないほどたくさんの喜びもあれば、幸せもありました。

11月11日

《時局・時事問題》 「少年達を犯罪や非行に走らせないために」

増本弘文

概要

近年、少年犯罪・非行が多発するとともに、凶悪化している。特に未だ記憶に新しい神戸連続児童殺傷事件に代表されるように、従前の犯罪とは性質の異なる少年犯罪が発生しているといわれている。いわゆる「切れる」という言葉で表現されるように、極普通の少年がある日突然凶悪な犯罪を行う。また、既に小学校でも学級崩壊が起こるなど、子供達の世界は混乱しきっているように思える。これに対し、親も教師も社会も、有効な対策を打ち出すことができないどころか、無力感や恐怖心すら感じている。

今の子供達は、昔の子供達と比べて変わってしまったのであろうか？現状を見ると変わってしまったと言わざるを得ない。変わってしまった原因として、①核家族化に伴う母子関係の緊張化、②共同社会の崩壊、③平等主義の浸透、④経済的豊かさ、を挙げることができる。これらの要因に対処するには、何よりも、大人と子供の関係を、信頼と受容の関係に変えることである。

11月25日

《時局・時事問題》 「日本経済の行方」

田中文憲

概要

日本のバブル経済は、東証株価が38,915円をつけた1989年の年末をピークにして崩壊し、その後10年たった現在においても、立ち直ることができずにいます。政府による公共投資を中心とする景気浮揚策が行き詰まりつつある現在、最終的な解決策として、アメリカ流の思い切ったリストラ、つまり構造改革が叫ばれています。しかし、これは大変危険な外科手術だと言えます。たとえば、銀行の不良債権問題をとってみても、アメリカと日本では不良債権額の桁が違うため、アメリカで成功したからといって、日本でやると大変な社会不安を引き起こし、日本経済に壊滅的打撃すら与えかねません。景気が回復しない最大の原因は、日本人の自信喪失です。バブルがはじけたといっても、日本の経済システムのすべてが悪いわけではありません。もちろん手直しは必要ですが、何より重要なことは、日本人の持つ強味をもう一度見直し、これを最大限活かすことです。

奈良大学文化講座

世界遺産－ならと世界－

9月22日 「古都奈良の文化財」と地域

土 平 博

近年、注目を浴びている世界遺産がこの講座全体のテーマであるが、そのうち、第1回目は導入部として位置づけ、日本各地の世界遺産と比較検討しながら奈良の地域的特色を考えてみたい。

1998年12月に京都で開かれた第22回世界遺産委員会で、奈良が「古都奈良の文化財」として世界遺産のリストに登録された。この登録にあたっては、各資産が個々に評価を受けたのではなく、資産全体がもつ奈良の歴史や風土が評価の対象となった。奈良の世界遺産登録は建造物、自然林を含めた集合体、つまり、地域単位として登録されている点に特色があり、その世界遺産登録の一事例とみなすことができる。

従来から奈良は修学旅行や一般的な旅行の観光地として広く知られ、その観光地というイメージと世界遺産登録が何らかの形で結びつく傾向にある。この結びつきを地域という枠組みでとらえてみると、どのようなことが見えてくるのであろうか。ご出席の皆様とともに考えてみたい。

9月29日 「奈良の祭りと芸能」

笠 置 侃 一

かつて、人々の営みとともに生まれ育まれてきた芸能が、今も古典芸能・伝統芸能として伝承されている。

奈良にはかなり多くの祭りや芸能が数えられるが、やはり奈良の師走を華やかに彩る「おん祭」をあげるべきであろう。12月15日から18日に行われるこの祭りは、国指定の重要無形民俗文化財になっていて、正式には「春日若宮おん祭の神事芸能」といわれる。

若宮神が16日の深夜に御旅所へ遷られる、実に厳粛で神秘的な秘儀は筆舌に尽くすことができない。17日当日のお渡りの行列の華やかさや、「芸能の祭典」ともいわれる多くの芸能も時を忘れるほどである。

「薪御能」は5月11日と12日に春日大社（午前）と、興福寺南大門跡（午後）で行われる。日本の能楽の歴史とともに歩んできたのがこの薪能である。大和猿楽の金春座、観世座、金剛座、宝生座の四座がそろって奉納されるのは、この薪能だからこそである。あかあかと薪に照らさ

れる演能に、歴史の重みをひしひしと感じる。

1998年、「古都奈良の文化財」8件が世界遺産に登録された。これら社寺の古い建物などは単に目に見えるものだけを考えがちであるが、日本文化がそのままの姿で神聖な道場として、又は信仰のよりどころとして、祭りや芸能のなかにいまなお息づいていることを忘れてはならない。

10月6日 「世界遺産都市クスコとケチュア語」

青木芳夫

南米ペルーの代表的都市の中では、海岸都市リマの歴史地区と高地都市クスコの市街が世界文化遺産に指定されている。前者が主としてスペインの植民地時代の面影を残すのに対して、後者のクスコはかつてインカ帝国の首都だっただけに、たとえばカトリック教会建築とインカ式石組みのように、スペイン的要素とインカ的要素の共存によって知られる。

クスコ市街が世界文化遺産に指定されるのは複合遺産のマチュピチュ遺跡と同じ1983年のことである。クスコ市の市旗は現在、インカ帝国つまりタワンティンスーユの旗といわれる「七色の虹の旗」であり、また1990年には市名が Cusco からインカのことば＝ケチュア語にしたがって Qosqo に変更された。このように、クスコ市は、新しい「まちづくり」のアイデンティティの中心にインカ・イメージを選択しようとしている。このような変化の背景には、国際観光都市としてのクスコの海外イメージも大きかったであろうが、それとともに周辺の農村部や他都市から先住民人口が大量に流入してきたことに伴って、それまでクスコ市生まれが大半を占めてきた市民の構成が変化し、多様化してきた、というクスコ市内部の社会的要因が影響している。

今回の文化講座では、この南米インカのことば＝ケチュア語、日本語の「てにをは」に似てたくさんの接辞がその文章表現を豊かにしているケチュア語、の楽しさを体験していただきたい。

10月20日

「西安と奈良」

笥久美子

中国の古都・西安は、紀元前の漢王朝時に、「長安」と名づけられ、その後も、隋、唐などの首都として繁栄し、中国の歴史上重要な役割を果たした長い歴史を持っています。なかでも世界最大の国際都市として頂点を極めたのが唐王朝（618～907）の時代でした。文明先進国の首都として建設された長安城は、シルクロードはもとより、東方や南方にも海路による四方への往来ルートを開きましたから、周辺の地域から多くの人々が、憧れをもってやってきたのです。

そうした世界的な国際交流の場でもあった長安に、わが日本も正式に大使や留学生を送り、交流の仲間入りをしました。とくに留学生として選抜され、遣唐使船で渡唐した日本人のひとりが唐王朝に仕えた阿倍仲麻呂であったことはよく知られています。彼の時代の奈良と長安とを視野に入れながら、当時の日本と中国の交流の様子をのぞいて見ることにしましょう。

10月27日 「世界遺産が活用できない都市ティール」

泉 拓 良

ティールは、南レバノンに位置する世界文化遺産のある都市である。

古代に地中海の覇権をギリシア・ローマと争ったフェニキアの中心都市として有名であり、また、ローマ時代には、貝紫という赤色染料やフェニキア・ガラスの生産地として、以前にもまして繁栄した都市である。キリスト教時代には、奇跡の起こる都市として多くの巡礼を迎え、巨大な死者の町が郊外に形成された。その後も繁栄は続き、現在はレバノン第4の都市として近代的なビルが建ち並んでいる。

世界文化遺産に登録されているのはフェニキアの遺跡と中世の町並みであり、レバノン考古総局（D. G. A）のスール（ティールの現在名）支部が保存と整備に当たっている。遺跡の保存地区にはそれなりの施設があり、さらに夜間のライトアップの準備もあり、決して他に劣っているとは言えない。また、町並みも順次建物の修理や復元をおこなっていて、それなりの努力は払われていることは確かである。しかし、レバノン内戦の終了、イスラエルの南レバノンからの撤退以降も、観光客はいっこうに増える気配がない。

その最大の原因は、レバノンの観光立国化への嫌がらせとさえ思ってしまうイスラエルの度重なる周辺への攻撃である。しかしそれだけが原因とも思えない。講座では、ティール遺跡の紹介とともに、弱小国でかつ政情が不安定な世界文化遺産都市の悩みを述べてみよう。

平成13年度奈良大学社会学部公開講座報告

【テーマ】おもしろ文化講座「女性・環境・文化を考える－古今東西総ざらい－」

【概 要】

上記テーマのもとに、以下に示す3回の講座を開催した。本年度は、はじめて外部機関（「クレオ大阪東」）との共催事業とし、会場の提供等の協力を得た。こうした運営形態の変更も功を奏し、各回ともこれまでの公開講座を大きく上回る一般参加者を得て大変盛会となった。さらに、講座の成果をまとめた小冊子も刊行したので、各回の内容詳細は、当冊子を参照された

い。

【第1回】

テーマ：万葉のころ、現代のころ

①女歌と女ころ～「万葉集」から考える～（講師：上野誠（文学部助教授））

②身体で感じる心もよう～心理学入門～（講師：矢守克也（社会学部教授））

日時：9月29日（土）13時30分～15時40分

場所：大阪市立男女共同参画センター東部館（クレオ大阪東）研修室

参加者：53人

内容：①では、「たまげる」という言葉の由来（「タマ（魂）+アガル（上がる）」）をヒントに、古代の人々が有した心身感について講じられた。②では、鏡映読み実験、遅延聴覚フィードバック実験などを通して、身体心理学に立場から心身問題について論じられた。その後、2人の講師が、万葉文学、心理学の2つの立場から、心身問題の対するアプローチについて模擬討論を行い、さらに、聴衆も交えたディスカッションが展開された。

【第2回】

テーマ：女性と環境問題

①女性の学習環境～日米比較～（講師：遠藤由美（社会学部教授））

②女性が取り組む環境問題（講師：平岡義和（社会学部教授））

日時：10月6日（土）13時30分～15時40分

場所：大阪市立男女共同参画センター東部館（クレオ大阪東）研修室

参加者：45人

内容：①では、講演者のニューヨーク滞在経験をもとに、アメリカ社会における機会平等原則について述べられた後、日米における女性の学習環境の異同について論ぜられた。②では、ダイオキシン問題、海外での環境汚染問題など、ホットな環境問題について報告され、家庭、すなわち、足元から始める環境対策の意義について、環境社会学の見地から論じられた。

【第3回】

テーマ：食から文化を考える

①北京食べ歩き紀行～レストランの味・家庭の味～（講師：松戸武彦（社会学部教授））

②香港食べ歩き紀行～レストランの味・家庭の味～（講師：芹澤知広（社会学部専任講師））

日時：10月20日（土）13時30分～15時40分

場所：大阪市立男女共同参画センター東部館（クレオ大阪東）研修室

参加者：45人

内容：①では、講演者の北京在住体験をもとに、北京の台所事情がユーモラスに紹介された。あわせて、レストラン、大衆食堂など、街角にあふれる食の現場こそが、社会変動を感じ

る場であることが強調された。②では、飲茶とアフタヌーンティの混在という事実をヒントに、食を通して文化を知ることの意義、さらには、社会を知ること、経済を知るとは文化そのものを知ることであることが強調された。